

小児看護学実習で急性疾患を受け持った学生の学び

糸井志津乃 恩澤美恵子 上松恵子

(Shizuno ITOI Mieko ONZAWA Keiko UEMATSU)

【要約】

小児看護学実習での急性疾患を受け持った学生の学びを明らかにするため学生の記録を実習目標の4つの視点から分析した。対象は3年次生の28名であり、受け持った急性疾患は約6割が呼吸器疾患、年齢区分は乳幼児であった。受け持ったケース数は、1事例のみが約6割であり、2事例以上が約4割であった。結果：199コードの記述から13のカテゴリーと31のサブカテゴリーで構成されていた。患児の健康状態を短期間で把握し充実した実習を行っていた。短期間の実習には、事前学習・記録での振り返りと一緒にケアに入る指導体制の設定が学生の援助内容を支え、学生個々の学習課題の設定によって積極的な実習になることが示唆された。しかし、家族との関わりにおいては、面会時間の制約のある病院の場合、学生が家族との関わりが持ちにくく関わりのない学生と関わりのある学生とでは学習上の差がみられた。実習内容の調整を図る上でも意図的な情報提供や外来実習等の他の実習方法の検討が課題となった。

キーワード：小児看護学実習、急性疾患、大学生、学び、内容分析

1. はじめに

小児看護学実習では健康障害をもつ子どものケアを理解する必要があるが、実習する施設の病院を取り巻く状況は厳しい。小児医療の高度化が進む一方で、少子化や病院経営の採算の問題等で小児病棟をもたない病院もみられ、さらに、急性期型の病院では、子どもの入院期間の短縮傾向や実習対象となる患児の減少もある。そのため、学生が実習するにあたっては十分に看護過程が展開できないといった課題もある¹⁾。また、看護学生においては、少子化の社会で育ち子どもと関わる機会が少ないために苦手意識を抱き、子どもの機嫌に振り回される傾向がみられる²⁾。学生が子どもとのケアを実施するにあたって戸惑う内容としては、子どもの欲求の理解、関係の築き方、両親との関わりに対する心理的圧迫などがあると言われている³⁾。しかし、指導によっては、学生は戸惑いから学びへと変容していくとされ、指導環境が影響することは否め

ない^{4,5)}。

そこで、本研究では、急性疾患を受け持った学生の学びの内容を明らかにし、今後の実習内容、指導方法を検討する資料とすることを目的とした。

2. 目的

小児看護学実習で急性疾患を受け持った学生の学習内容を明らかにし、実習内容および指導方法の検討資料にすることを目的とした。

3. 研究方法

1) 期間：2010年5月～12月

2) 分析対象：実習終了時に急性疾患を受け持った学生のうち研究の許可が得られた3年生の28名の記録内容である。記録物は実習終了後に目標に照らして学生が自分自身の実習を振り返った記述の内容のもので

ある。

3) 分析方法

分析は以下の手順で行った。①学生が記録した文章を精読し、内容の意味していることを読み取り類似のものをまとめてサブカテゴリー化した。②サブカテゴリーの意味が共通しているものを合わせて抽象度を上げてカテゴリー化した。

4) 倫理的配慮

実習終了後、急性疾患を受け持った学生に研究目的、プライバシーの保護、成績には影響のないことなどを口頭・説明書で説明し同意書への署名により研究参加の承諾を得た。

4. 実習の内容・実習病院の特徴

1) 実習内容

2年次9月に保育園実習を5日間行い、3年次に健康障害をもつ子どもを対象とした実習を行う。実習期間は5月から7月、9月後半から11月後半までの約6ヶ月行う。1クールの実習期間は5日間であり1グループ4～5名で行っている。

3年次の小児看護学実習の目的は「乳幼児・学童・思春期にある病児（以下、小児とする）の健康障害を理解し、家族を含めた総合的視点から小児の権利を尊重した看護を展開する基礎的能力を養う。」である。さらに、実習目標は、「①小児を成長・発達、家族関係を含めた総合的視点から捉えられる。②小児を一人の個として尊重し、その特性を理解し家族を含めた適切な援助方法を理解する。③小児とその家族や保健医療チームとの相互作用を通して、自己理解を深め自己の課題を明確にする。④小児とその家族を取り巻く医療、保健、福祉、教育の連携の中で、小児看護の役割を理解する。」としている。

2) 実習病院および実習内容の特徴

病棟での実習では、3施設の小児病棟を使用し1施設は専門病院、2施設は急性期型の一般病院である。

研究対象とした2施設の急性期型の一般病院は、いずれも平均在院日数が3～5日と短期間であり、急性疾患および乳児期・幼児期の患児が多く入院する傾向にある。

5. 結果

1) 受け持ちケースの概要 (N=28)

(1) 学生の受け持ちケースの疾患別分類割合 (表1)

学生が受け持った急性疾患は、約6割が呼吸器疾患であった。次にアレルギー疾患（気管支喘息）、消化器疾患（胃腸炎、腹痛）、感染症（髄膜炎、耳下腺炎）、痙攣性疾患（熱性けいれん）、腎・泌尿器疾患（尿路感染症）の順に高かった。

表1 学生の受け持ち疾患の疾患分類 別割合 (N=40)

疾患名	件数	%
呼吸器疾患（肺炎、気管支炎、RS感染症含む）	25	62.5
免疫・アレルギー（気管支喘息）	6	24
消化器疾患（胃腸炎、腹痛）	3	7.5
感染症（髄膜炎、耳下腺炎）	3	7.5
けいれん性疾患（熱性けいれん）	2	5
腎・泌尿器系疾患（尿路感染症）	1	2.5

(2) 受け持ちケース数および発達段階別分類

学生が受け持ったケース数は、1事例16名、2事例以上は12名（内訳：2事例8名、3事例4名）であった。発達段階別分類は表2に示した。幼児期前半が47.6%と一番多く、次に乳児期、幼児期後半の順であった。

表2 受け持ち患児の年齢別分布 (N=42)

年齢別区分	年齢	人数 (N)	%
乳児期	0歳	15	35.7
幼児期前半	1～3歳	20	47.6
幼児期後半	4～5歳	7	16.7

2) 学生の学びの内容

学生の記述内容を実習目標の4つの視点から分析したところ199コードが抽出され、13のカテゴリーと31のサブカテゴリーで構成されていた。（表3～6）。

(1) 看護の対象である患児やその家族の状況理解について（表3）

学生は看護の対象である患児やその家族の状況理解については表3に示した。

① 健康問題の理解

このカテゴリーは、学生が実習の初日に把握する患児の健康問題を理解する手立てを示しているものである。

サブカテゴリーは「入院までの（病状）経過と発

達状況をカルテから理解した」「健康問題をカルテや患児を観察した状況からアセスメントできた」の2つで構成されており、学生は健康問題をカルテ上および観察した状況から把握していた。

② 発達状況の理解

このカテゴリーは、学生が患児のケアを実施するにあたり、成長発達の状況を理解する手立てを示しているものである。サブカテゴリーは「関わりから成長発達の状態を捉えた」「一般的な発達の視点から患児を観察しケアを考えた」の2つで構成されており、学生は発達状況を関わりから一般論と照らし理解を深めていた。

③ 家族のおかれた状況の理解

このカテゴリーは、学生が家族の状況を理解した内容を示しているものである。サブカテゴリーは「患児の入院による患児・家族の生活の変化を知った」「母親との関わりから患児と家族との関係性を理解した」「家族と会えず家族のおかれた状況を捉えられなかった」の3つで構成されており、家族と関わった学生は、入院によって変化した家族の生活状況や、家族との関係性について理解している。しかし、実習時間中に家族に会えていない学生は、家族のおかれた状況について知る機会が得られていなかった。

表3 看護の対象である患児やその家族の状況理解

カテゴリー	サブカテゴリー
健康問題の理解	入院までの（病状）の経過と発達状況をカルテから理解した
	健康問題をカルテや患児を観察した状況からアセスメントした
発達状況の理解	関わりから成長発達の状態を捉えた
	一般的な発達の視点から患児を観察しケアを考えた
家族のおかれた状況の理解	入院による患児・家族の生活の変化を知った
	母親とのかかわりから患児と家族の関係性を理解した
	家族と会えず家族のおかれた状況を捉えられなかった

(2) 援助方法の理解について（表4）

援助方法の理解については表4に示した。

① 患児のニーズを理解する努力

このカテゴリーは、学生が乳幼児と関わる際に、患児のニーズを理解するために努力した内容を示している。サブカテゴリーは、「年齢に合わせたコミュ

ニケーションを図る」「表情・タッチングなどの非言語的コミュニケーションの活用」の2つで構成されていた。年齢に合わせたコミュニケーションでは、年齢に合わせてかみ砕いた言葉で語りかけ、非言語的コミュニケーションでは、表情・タッチングなどを活用していた。日常生活援助を行っていくなかで患児に寄り添い理解を深めていた。

② 安静を図るための患児に合わせた遊びの計画と実施

このカテゴリーは、急性疾患の患児がベッド上で身体に負担なく過ごせるために、学生が実施したケア内容を示しているものである。サブカテゴリーは「発達段階から患児の興味・関心のある対象を把握」「遊具の選択と制作」の2つで構成されており、学生は、患児の興味・関心のある対象を年齢から導きだし、遊具をプレイルームや患児の持ち物から選定していた。また、学生の計画として、実際に学生が制作し患児に適切であるかどうかを試みていた。

③ ケア・処置に対する恐怖感を最小限にする工夫

このカテゴリーは、乳児や幼児期の患児に恐怖感を最小限にするために学生が実施したケア内容を示しているものである。サブカテゴリーは「ケア時の声掛け」「処置・ケアの短縮化」「処置時の患児の頑張りに対する称賛」の3つで構成されていた。学生は、ケアや処置前後に子どもへ恐怖感を抱かせないように説明や声掛けを行い、実施する処置およびケアの時間を手早く実施することに気を使っていた。さらに処置等ができたことに対して誉め、子どもの達成感に結び付くように配慮しながらケアを行っていた。

④ 患児の年齢・健康レベルに合わせたセルフケアの計画と実施

このカテゴリーは、学生が患児のケアを実施する際に患児ができることとできないことを成長発達段階や健康レベルに合わせて計画・実施した内容を示しているものである。サブカテゴリーは、「患児のできることとできないことの見極め」「事故防止の援助」「患児の生活リズムの把握とケア」の3つで構成されていた。学生は、患児の成長発達や健康状態での状況を把握し、短期間の入院期間の中でも事故に注意して学生自身ができる日常生活上の援助を行っていた。

⑤ 入院による家族への影響を理解しケアへ結びつ

ける努力

このカテゴリーは、学生が患児とその家族を一単位として考える際に、入院による家族への影響を考えケアへ結びつける努力を示しているものである。サブカテゴリーは、「家族の身体・心理・経済面の負担を考察」「家族への気遣い」の2つで構成されていた。学生は、入院によって家族がどのような状態になっているのかを、身体・心理・経済面の視点から考察し、家族との関わりがもてる機会のあった学生は、労いの言葉をかけるなどの家族への気遣いに努力していた。

表4 援助方法の理解

カテゴリー	サブカテゴリー
患児のニーズを理解する努力	年齢に合わせたコミュニケーションを図る
	表情・タッチングなどの非言語的コミュニケーションの活用
安静を図るための患児に合わせた遊びの計画と実施	発達段階から患児の興味・関心のある対象を把握
	遊具の選択と制作
ケア・処置に対する恐怖感を最小限にする工夫	ケア時の声掛け
	処置・ケアの短縮化
	処置時の患児の頑張りに対する称賛
患児の年齢・健康レベルに合わせたセルフケアの計画と実施	患児のできることとできないことの見極め
	事故防止の援助
	患児の生活リズムの把握とケア
入院による家族への影響を理解しケアへ結びつける努力	家族の身体・心理・経済面の負担を考察
	家族への気遣い

(3) 実習中の学生の課題に対する取り組みについて (表5)

学生の実習中の課題に対する取り組みについては表5に示した。

① 学習課題をもって積極的に実習に臨む

このカテゴリーは、学生が実習中に抱く学習課題に対して積極的に取り組んでいる内容を示したものである。

サブカテゴリーは、「日々の振り返りによる自己の傾向における課題の発見」「自己のコミュニケーションの傾向を改善」「安全安楽に行うケア」「活発な意見交換」「指導を仰ぎケアの改善」5つで構成されていた。学生は、ケアを日々振り返り自分自身の傾向から学習課題を見出すもの、自分自身のコミュニケーションの傾向に対して問題意識を抱くもの、

より安全安楽に実施していくためのケアを意識して実施するもの、意見交換を活発に実施するために努力するもの、目的的に指導を仰ぎケアの改善を試みているものがいた。個々の学習課題に向けて努力している様子がみられた。

② 今後の学習課題が明確になる

このカテゴリーは、学生が小児看護学実習中に見出した学習課題を示したものである。サブカテゴリーは、「看護技術の正確さ、素早さ、応用力を目指す」「実習での積極性の改善」「学習不足の改善」の3つで構成されていた。学生は小児看護学実習で技術や実習への積極性、学習不足の改善を図ることが必要と意識し、今回の実習が次の実習に向けて目的意識を抱く機会になっていたことがわかる。

表5 実習中の学生の課題に対する取り組み

カテゴリー	サブカテゴリー
学習課題をもって積極的に実習へ臨む	日々の振り返りによる自己の傾向における課題の発見
	自己のコミュニケーションの傾向を改善
	安全安楽に行うケア
	活発な意見交換
	指導を仰ぎケアの改善
今後の学習課題が明確になる	看護技術の正確さ・素早さ・応用力を目指す
	実習での積極性の改善
	学習不足の改善

(4) 小児看護の役割の理解について (表6)

小児看護の役割の理解については表6に示した。

① 成長発達を踏まえた安全な環境設定

このカテゴリーは、学生が乳幼児期子どもたちに必要な環境であると理解した内容である。サブカテゴリーは「事故防止への気配り」「保育士との連携による成長発達へのサポート」の2つ構成されており、学生は患児のケアを通して、事故の危険性の多さに気づき注意していた。さらに、保育士が病棟で看護師との連携しながら患児たちの保育に関わっていた姿をみて学んでいた。

② 患児の発達を考慮したセルフケア

このカテゴリーは、学生が患児にケアを行うに際して必要な知識・技術を実感した内容である。サブカテゴリーは「患児の成長発達の理解」「子どもに合わせた的確な技術の提供」の2つで構成されていた。学生は患児の成長発達の相違を理解し的確にケ

アが実施できることの必要性を理解していた。

③ 退院に向けた家族へのサポート

このカテゴリーは、学生が病棟で医療者の行動を見て理解した学びの内容である。サブカテゴリーは、「医師や栄養士等の他職種との連携」「家族に対する退院前の外泊指導」の2つで構成されており、学生は患児を通して家族への栄養指導の場面や外泊指導を受けている状況を見学させてもらいながら必要性を理解していた。

表6 小児看護の役割の理解

カテゴリー	サブカテゴリー
成長発達を踏まえた安全な環境設定	事故防止への気配り
	保育士との連携による成長発達へのサポート
患児の発達を考慮したセルフケア	患児の成長発達の理解
	子どもに合わせた的確な技術の提供
退院に向けた家族へのサポート	医師や栄養士等の他職種との連携
	家族に対する退院前の外泊指導

6. 考察

1) 看護の対象の健康状態を短期間で把握する

学生は早期に患児の健康問題や発達状況をカルテや実際の患児とかかわり一般論と照らしながら把握するよう努力していた。そして、家族と関わった学生は、入院によって変化した家族の生活状況、家族との関係性について理解している。しかし、実習時間中に家族に会っていない学生は、家族のおかれた状況について知る機会が得られていなかった。

学生が患児の状況をカルテだけでなく実際に関わっていく中で理解を得ていることは、実習初日に、指導者または看護師スタッフが日常生活援助や輸液関係、与薬を実際に行っている場面の見学などを積極的に行わせていただいていることが影響していると考えられる。学生が知識・技術を活用するためには看護実践の行われている状況に居合わせ看護実践の意味・価値を捉えることができる具体的な経験をすることであると言われる⁶⁾。短期間の実習の中で、早期に患児のケアの状況に居合わせる事が対象理解の良い機会になっていることが示唆される。

家族との関係においては、実習施設が家族の付き添いを基本的に実施していないことが影響している。学生は面会時間内での関わりしかもてない状況にあり、

実習時間内に家族が面会にみえていれば家族との会話によって患児の状況を理解する機会を得ることができると考える。しかし、会う機会が得られなかった場合には、学生の経験に差ができてしまっていると考えられる。これを補うためには、カンファレンスでの情報交換、指導者からの情報を得る、外来実習の取り入れによる検討が必要と考える。

2) 事前学習と指導体制が学生の援助内容を支える

援助方法については、患児のニーズを理解する努力を行い、安静を図るための患児に合わせた遊び、ケア・処置に対する恐怖感を最小限する工夫、患児の年齢・健康レベルに合わせたセルフケアの計画と実施、入院による家族への影響を理解しケアへ結びつける努力をしていた。短期間でありながらも、患児ができることとできないことを見極め、一般論と照らしながら日常生活援助を通して必要な学習を行っていた。

学生が受け持つケースは、急性疾患でも軽症であることが多く比較的病態が安定している。子どもとの関わりに経験が少ない学生たちは、どのタイミングで関わればよいか戸惑うことが予測され、子どもの安全面の保障を行うことも含めて看護師スタッフや指導者、教員と一緒に関わっている。また、事前学習として、学生たちは各年代の発達や受け持つ可能性のある13疾患および技術面等の復習ノートを作成している。さらに、見学した体験も含めて、日々の記録に実施したことの意味づけを記載している。小児看護学実習では、入院期間の短縮傾向や実習での時間的制約から、継続したケアプランの実施、看護過程の展開が困難である。そのため、対策として西田らは⁷⁾ 学生自身が意味づけをしていけるような実習、特に子どもとのコミュニケーションの取り方、援助に力点をおき、直接的な経験・体験を通じた学びになるよう関わる必要があると述べている。

学生が短期間でも必要な学習が行えていたのは、実習事態に戸惑いのある早期から指導者等と一緒にケアに入り事前学習や記録によるケアの意味づけをする環境が影響していると考えられる。

3) 学習課題を設定し積極的に実習に取り組む

学生は、ケアを日々振り返り自分自身の傾向から学習課題を見出し、自分自身のコミュニケーションの傾向に対して問題意識を抱くもの、より安全安楽に実施

していくためのケアを意識して実施するもの、意見交換を活発に実施するために努力するもの、目的的に指導を仰ぎケアの改善を試みているものがいた。個々の学習課題に向けて努力している様子がみられた。また、小児看護学実習の中で、技術や実習への積極性、学習不足の改善を図ることが必要と意識し、今後の学習課題を明らかにしていた。今回の実習が次の実習に向けて目的意識を抱く機会になっていたことがわかった。

看護教育の中では、実習という体験を通して自己成長を図るために、学生自身が個人目標をもつことの重要性が問われている⁷⁾。学生の実習中の学習課題は、困難であった内容を改善しようとしており、積極的に取り組む内容であった。学生が問題意識をもって課題に取り組んでいることは、できなかったことが少しずつできるようになり、学生にとっての自己成長の機会となり達成感にもつながる経験になっていたと考える。

4) 見学および実施したケアを含めて小児看護の役割を理解する

学生は、成長発達を踏まえた環境設定、患児の発達を考慮したセルフケア、退院に向けた家族へのサポートについて、小児看護の役割として学んでいた。学生は自分自身が実施したケアだけでなく、できなかったことに対しても保健医療チームの動きを観察し、患児の必要なケアを学習していた。

小児医療において、医療を必要とする子どもの療養生活についての専門知識をもった支援が必要であり⁸⁾基礎教育において、短期間の実習であっても、学生が患児にとって必要なケアや必要な環境、他職種との連携について理解しておくことが重要である。学生が実施できなかったことについては、学生自身の学習課題として、次の実習の際に達成できるように努力していくことで実践的な能力が身についていくと考える。

7. 結論

急性疾患を受け持った学生の学びを学生の記録から分析した結果、看護の対象の患児の健康状態を短期間で把握し充実した実習を行っていた。短期間の実習には、事前学習と一緒にケアに入る指導体制の設定が学生の援助内容を支え、学生個々の学習課題の設定によって積極的な実習になることが示唆された。しかし、

家族の関わりにおいては、面会時間の制約のある病院の場合、学生が家族との関わりが持ちにくく関わりがあった学生と学習上の差がみられた。実習内容の調整を図る上でも意図的な情報提供や外来実習等の他の実習方法の検討が課題となった。

【引用・参考文献】

- 1) 大原美香、荒木妙美、津田茂子：本学における小児看護学実習の現状と課題（その1医療施設実習において）、看護学統合研究 7、13-20（2006）
- 2) 小代仁美、植木野裕美：小児看護学実習において看護学生がこどもと関わることを躊躇させる影響要因、日本看護研究学会雑誌33、69-76（2010）
- 3) 古河菜々美、川村紗奈美、今村実樹他：小児看護学実習において看護学生が感じた困難に対する要因（第2報）、Journal of UOEH 33、94（2011）
- 4) 甲斐鈴恵：学生の認識の発展を促す実習指導に関する事例研究 小児看護学実習における指導者（研究者）の認識に焦点をあてて、日本小児看護学会 193、32-38（2010）
- 5) 藤田千春、永田真弓、廣瀬幸美：小児看護学実習において看護学生が受持ち児の家族との関係を築く過程、横浜看護学雑誌 4、49-55（2011）
- 6) 杉山喜代子、鈴木治代他：臨地実習における学びの様相—現象学的アプローチによる体験世界の記述—、看護研究 31、39-52（1998）
- 7) 西田志穂、込山洋美、江本リナ他：実習の実際、Quality Nursing 8、961-969（2002）
- 8) 西海真理：小児看護の専門性と今後の課題、小児保健研究 67、3-9（2008）

（2011年10月17日受付、2011年11月9日受理）